

上田正行先生と日韓交流を想う

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 崔, 在喆 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17437

上田正行先生と日韓交流を想う

崔 在 喆

(韓国外国語大学教授)

上田正行先生に初めてお会いしたのは、石川県国際交流協会主催の「日本語研修プログラム」に韓国外国語大学校日本語科の学部学生十五人を引率して、金沢を訪れた時のことでした。韓国外大の卒業生で金沢大学大学院博士課程（日本語学）に留学中だった孫京鎬君の紹介を通して近代文学専攻の留学生金希貞さんに会い、また、金さんの仲立ちで指導教官の上田先生にお会いして、お茶を一緒にしながら一時間足らず話し合ったのがきっかけでした。それは九年前の二〇〇〇年一月十七日(月)九時、金沢市内香林坊「アトリオ」内の喫茶店でのことでした。お互い専門分野が同じでもあり、森鷗外という共通のテーマが話題になったりして短い時間でありながら話は楽しくいろいろと弾んだことを、つい先日のことのように覚えてます。それ以来のご縁で、日韓・韓日の文学・文化交流の場を広めていくことにまで至りました。

日本近代文学会の北陸支部長を担当されていた先生と韓国外大大学院日本近代文学会を率いていた私は、いろいろとお互いの文学研究の交流を相談することになり、ついに第一回韓合同日本近代文

学研究会が二〇〇一年十二月一日、韓国外大で開かれることになりました。韓国外大大学院日本近代文学会は一九八九年に発足していましたが、日本近代文学専攻の修士・博士課程の院生と卒業生（非常勤講師、教員を含む）の会員数が、当時約八〇人ほどの研究会でした。一九九三年八月に学会誌「日本近代文学散策」を創刊し一九九九年三月に第五号、後に第六号（続刊号）まで出しました。主な活動は隔週一回（夏・冬休み中は毎週）の研究会と毎年二回の（野外学術セミナー）で、随時、他の大学院との（交流セミナー）や（招聘講演会）等を開いていたところでした。

そのような中で行われた一回目の合同研究会は韓日両方から二人ずつ発表を行い、各発表に対して両方から各一人ずつコメントをするというプログラム進行でした。（研究発表Ⅰ）は、上田先生の「徂征日記」に見る鷗外の戦争へのスタンス」と私の「森鷗外と韓国」、（研究発表Ⅱ）は、渡辺喜一郎氏（北陸高校）の「地方詩人・則武三雄と韓国・朝鮮―三好達治と田中英光との関係を中心に―」と、許呉氏（水原大学）の「三島由紀夫とナショナリズム」でした。私

の発表は既掲載の論文でしたが、上田先生の鵬外論は実に客観的だ
という感じを受けました。また、渡辺氏は帰国後、北陸学園校友誌
『尚友』に書いた『韓日合同日本近代文学研究会』に参加して、
ご自分の主題が韓日にかかわるもので緊張したということや、発表
後の感想や当日の研究会の様子などを記しています。

研究会の次の日は、韓国の文化史跡探訪として慶福宮や国立民俗
博物館の観覧をしましたが、安重根義士記念館や西大門刑務所歴史
博物館を訪ねて日帝時代の傷痕を観て歩くということを考えられた
先生に、特別な印象を受けたことも事実です。

さらに、俳句を嗜まれる上田先生に私は一句打たれました。とい
うのも、合同研究会の前日のお迎えの懇親会の席上で先生はご自分
の俳句、

漢江を渡れば冬陽目に温し

を披露されて日本の習慣云々をなさった後で、私に、返句をどうぞ、
と来たのでした。いきなりのことでもあったので一旦、お帰りの晩
餐会の席で、とその場を逃れて二日間苦心した筈句、

木枯しや倭の客来られ禮興し

と、応えたのでした。これは、久し振りの五・七・五で、史跡見学
に慶福宮の興禮門の前を通る時の思いつきですが、その後の二〇〇
二年正月の年賀状に上の二句を並べ添えて、記念といたしました。

また、その時のことを、日本近代文学会北陸支部事務局長の水洞
幸夫氏（金沢学院大学）は、〈支部だより―北陸支部〉（日本近代
文学会「会報」第九六号、二〇〇二年四月）に第一回合同研究会の
消息を書かれた終わりの箇所で、〈小松とソウルは飛行機で二時間
足らずの距離であり、会員相互がじっくりと話し合う場を持つこと
が出来た今回の研究会によって、お互いの交流は確かな一歩を踏み
出した。〉と記しています。

二〇〇一年十二月頃から私は一年間の研究年を取り、日韓文化交
流基金の支援を受けて留学時代の出身大学の東京大学比較文学比較
文化研究室の客員研究員として渡日しました。東京の学会で先生と
再会し、二回目の合同研究会を金沢で開く具体案を推進しました。
二〇〇二年の春から韓国日本近代文学会の学会誌『日本近代文学―
研究と批評―』創刊号の五月発刊に向けて、企画と編集に精を出し
ていた時期で、金沢開催の第二回研究会の準備もその頃から始めま
した。

韓国日本近代文学会は前出の韓国外大大学院日本近代文学会を母
体として専攻分野の研究者たちと協力して一九九九年に創立した学
会であり、約百七十人の会員を持つまでに成長・発展を遂げていま
す。学会誌第五号発刊（二〇〇六年）や企画図書シリーズ第一巻『日
本近代文学と恋愛』（二〇〇八年）の刊行など、日本近代文学会
という一つの専門分野で韓国の全国的な組織を持つて運営されてい
る唯一の学会となっております。創刊号には拙論「日本文学の現場」
を含む二十余編の論文のうち、合同研究会の発表論文を基礎とした
上田先生の「日清戦争と森鷗外―「徂征日記」中心に―」と渡辺氏

の「日本の一人の地方詩人と植民地韓国体験―則武三雄の場合―」を掲載することになったのは、第一回目の交流での確かな実績の証です。

第二回の日韓合同日本近代文学研究会は日本近代文学会北陸支部が準備し、韓国外大大学院日本近代文学会・韓国日本近代文学会との共同主催により二〇〇二年十一月三十日(土)午前から石川近代文学館(二階教室)で、「文学空間としての〈金沢〉」をテーマに開催されました。金沢とゆかりのある泉鏡花、室生犀星、中野重治の三部構成で、それぞれ日韓双方から一人ずつの発表と、交互にヘコメントとヘデイスカッションをはさんで一日がかりの研究会はとても充実したものでした。韓国側の発表者はそれぞれが専攻している作家や分野ではなく日本側に主題を合わせて発表を準備したために、若干準備不足の感がなきにしもあらずでしたが、日本側の丸山桂一氏(金沢大学)の「歌のわかれ」に描かれた金沢」などの発表を拝聴することができて、得ることの多い研究会でした。その際、私は閉会の辞で金沢文学への知識を広めることができたこと、今回の合同研究会の意義、さらに東アジア文学の交流への視野拡大といったことを呼びかけたことと記憶しています。研究会の後の懇親会(秀峰閣にて)と二日目の文学歴史関係史跡の見学も、皆さんのご尽力で楽しく有益なものばかりでした。犀星記念館を始め鏡花ゆかりの地はもちろん、湯桶温泉での浴衣姿での懇親会などもとてもいいものでした。その中でも特に、尹奉吉義士殉国記念碑や暗葬之跡などの遺跡見学の企画などを通して、ソウルでの日帝時代の史跡見学を希望された時と同じく、誠意の籠った相互交流と善隣友好とい

うものの本当の意味を考えるようになりました。

水洞氏の回顧「文学空間へ金沢」を論じる―動き出した日韓合同の研究会―(『北国文華』第十五号、二〇〇三年―春)に引用された、eメールの自分の感想を紹介すると、次のようなものです。

金沢の街の印象は、伝統と現代がうまく共存しているという感じを受けました。兼六園、金沢城址を始め、昔の風情ある町並みをよく保存し、犀川などの自然と調和しているのも立派なものだと思います。金沢をテーマとし、文学散歩のコースに選んだ理由も、この辺にあると思われませんが、金沢という文学空間への本格的な理解まではもう少し時間が必要でしょう。

泉鏡花、室生犀星、中野重治等を生んだ金沢は、伝統を守っている独特の環境と人情味溢れる人々により、東京や他の地方とも違う、特徴の豊かな文学空間を形成していると思われまます。また、江戸時代の加賀俳壇のことも思い浮かんできませんが。

韓日の研究者の交流で何が生まれようとしているのかに付いては、これからのことですが、韓国の日本近代文学研究者と皆さんが交流を重ねて行けば、日本近代文学研究の深化と相互の理解はもちろんのこと、新しい研究交流のモデルの定着、地方文化の時代の実現等に寄与できると思われまます。皆様との協力もつと必要でしょうが。これからは、鏡花を始めとした金沢文学の翻訳紹介も心がけてみるつもりです。

このような交流が着実に進行すれば、お互いの文学を通じた、真の意味の韓日、日韓の友好関係作りにも大いに役に立つことと確信しています。金沢での一句を思い出までに添えますので、ご覧下されば幸いです。

犀川や再会嬉し冬の鳥

その後、ソウルでの上田先生との再会は二〇〇四年の秋でした。ソウルの誠信女子大学の学部長を勤めていた私の先輩の申英彦氏のお陰で、誠信女子大学校人文科学研究所の協力を得て開かれた第三回合同研究会の時（十月三十日、土曜）でした。研究会は四部構成となり発表者が増えました。金子幸代氏（富山大学）の「森鷗外と近代劇」を始め、申銀珠氏（新潟国際情報大学）の「中野重治の作品と天皇制」、團野光晴氏（石川高専）の「野坂昭如の『火垂るの墓』と日本の公共性」、奥田浩司氏の「有島武郎の『或る女』について」、木村小夜氏（福井県立大学）の「太宰治と手紙」、朴世榮氏（西京大学）の「戦後の過渡期における太宰治―執筆態度について―」、それに、台湾の林文賢氏（東呉大学）の「庄司総一の『陳夫人』考察」など、多様な主題で研究会が行われました。

合同研究会で先生は、朝早くから夕方終わるまでずっと席を外されることなく熱心に発表に耳を傾けられ、閉会の辞を述べられる時の真面目さは然ることながら、的確な表現のコメントと批評には感心するばかりでした。

二日目の文化遺跡探訪では水原市にある世界文化遺産・華城に向

かい、上田先生のお供をしながら皆さんと散策したりしました。

雉 外の動静を 窺うように

水原 華城 西二雉の穴から

晩秋を覗く

― 二〇〇五年正月初 年賀状（原文はハンゲル）

その後、奥田氏や金さん、それに柳利須さんが幹事役を勤め、日本の有島研究会メンバーと協力して韓国日本近代文学会主催の「白樺派文学と韓国」（韓国国外大、二〇〇六年八月二十二日）を開催しました。江種満子氏（文教大学）の「白樺派文学と韓国文学―一九一〇年代を中心に―」や王泰雄氏（慶北大学）の「武者小路実篤と〈新しき村〉の精神」の外、日韓双方で六本の論文発表がありました。

さらに、第四回目の合同研究会は二〇〇六年十一月二十五日（土）から二十七日（月）まで福井で行われました。越野格氏（福井大学）が中心となり、木村氏などの協力によって福井大学で開かれました。私にとって福井といえば、学部時代から日本語を教わった関聖泓先生が在日されていた時に中学校まで過ごされた地域としてのみ記憶していました。よい天気の下、空港から市内へのお迎えの車で福井平野を通って行きましたが、思ったよりも広くて開豁といった感じでした。

小春日和友と語らう福井の野

研究会の発表論文題目は、越野氏の「福井の郷土文学」、寺田達也氏（金沢学院大学）の「二葉亭四迷と東アジア、ロシア」、私の「安倍能成における〈京城〉」、金谷安氏（漢陽女子大学）の「川端康成の『伊豆の踊子』と黄順元の『驟雨』の比較」、徐載坤氏（韓国外大）の「萩原朔太郎の詩『青猫』の空間軸研究」などでした。

二十六、二十七日の両日間の三国、丸岡、福井の文学歴史関係史跡への見学はとても良いものでしたが、美味しい料理の懇親会を兼ねて芦原温泉（清風荘）に泊まったことも、記憶に新しいです。

冬の日や則武想う荒磯波

則武のことは、渡辺氏の第一回目の合同研究会でのご発表テーマを聞いてからいろいろと知識が増えましたが、皆さんとの実地を踏まえて歩くという経験からも、さらに感動の賜物として受け止めました。上の二句は、福井訪問記念として二〇〇七年の年賀状に書き添えてみたものです。

以上、上田先生と協同に作った四回に渡る韓日・日韓合同日本近代文学研究会の全プログラムの韓国日本近代文学会の学会誌『日本近代文学―研究と批評―』第五号の付録として載せてあります。

この他にも、以前東京の鵬外研究会で面識もあり、合同研究会の縁で金子氏のお招きを受けて、富山大学で開かれた二〇〇七年度日本社会文学会富山大会（十一月十一、十二日）でシンポジウムの司会を勤めさせていただいたこともあります。もちろん上田先生は駆

けつけて下さり学会に参席し、また懇親会を一緒にしながら旧交を温めました。その時は、学会に前後してヘールン（ラフカディオ・ハーン）文庫）を見学するなど、私と北陸三県との繋がりももっと確かか深いものになったと言えます。

上田先生のご著書『鵬外・漱石・鏡花―実証の糸―』（二〇〇六年）を贈っていただき拝読いたしました。第一回の合同研究会発表の鵬外論を含んだものもあり、へ緻密な考証と、想像力の源泉に迫る」という表現どおり、上田先生の学問に対する真摯な姿勢が分かる名著であるという読後感を得て勉強になりました。そして、金沢の人として先生はその土地に根つき、金沢関連の文人を主題とし、周縁から中心への批評のまなざしを以って、また、東アジアから、日本近代文学を読み解く労作『中心から周縁へ―作品、作家への視覚―』（二〇〇八年）を出され、お送り下さった時は、成る程という感じを受けざるを得ませんでした。また、先生の回顧文「日韓合同日本近代文学研究会の五年間」（日本近代文学会『日本近代文学』第七十五号、二〇〇六、十一）には、合同研究会の全記録がまとめられていると思います。

このように、ざっと先生とのお付き合いを振り返ってみました。お一人との出会いからこれほどのお付き合いと輪の広がりができるとは、縁とは不思議なものだと思います。上に記したことは、あくまで先生の温厚且つ着実なお人柄と専門分野に対する情熱、それに日韓友好交流にかける強い思いゆえに可能になったのだと思います。先生の人に対する思い遣りや優しさに心引かれたのは、私だけではなはずです。

最後に、先生との九年間を振り返ってみることは自分の仕事への反省にもなり、日韓文学交流の実績の反芻も出来たので微笑ましくなったりもしましたが、今後の方向性を考える上で大切な機会だったと思われます。また、立派に俳句と言えたものではありませんが、五・七・五で詠んで追憶を記すという愉しみも、格別なものでした。

雪の峯犀川流る想い出や

先生は金沢大学をご定年された後、新たに国学院大学大学院教授として赴任される予定だと伺っております。これからの上田正行先生の益々のご活躍とご健勝をお祈り申し上げます次第であります。